

第二期 第五十八号 (三版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2021.05.20 定有堂書店 発行

定有堂の「推し本」

真と善―「読む会」が求めてきたもの

汽水のほとりから (2)

あなたの人生の物語

結局ここにいる日記

桃と入学式、贈る言葉

奈良 敏行

岩田 直樹

小原 修治

萩原 俊郎

鳥居 貴彦

吉田 海将

ケアとセラピーをめぐる II

沖繩プロボノ記⑤

八代日記 (十四)

桃源郷あれこれ

鳥取あれこれ その五十七

不条理のメルヒェン

理解されるよりは理解することを

松田 裕史

芝野 浩貴

齊藤 仁昭

ムラカミヒロミ

内田 克彦

秦草 梅林

三浦 永理

← 下段右へつづく

同じ空 蟹の日々 (一)

猫 あきの素生

許さない女 ドラメラリア

…… 編集後記

新居戸メロ

あきの素生

ドラマメラリア

## 定有堂の「推し本」

奈良 敏行

(定有堂 店主)

店頭で、本をすすめて欲しいと、声をかけられることがある。若い男性に「クリエイティブな本を読みたい」と求められた。問いがあまりに大きくて一瞬たじろぐ。森のようには大きく茫漠とした問いだ。「大学生なの?」と聞く。「どこの大学?」「なぜそんな類いの本を読みたいの?」「そうか、行く末のことを考えているんだ」と問いを森から木へと倍率を変えていく。鳥取出身、九州の大学で水産専攻、この時期大学は面白くないが、バイト先の人がとて

も親切。その会席料理店の仕事が楽しい、というところまで問いの出自がせばまった。

そうか料理は彼にとつてクリエイティブなのかもしれないと思つた。ちょうど数日前、近くの食堂カルマの丸山さんと話をした。丸山さんは二年ほど前から鳥取に定住しはじめた人で、東京中野でレジエントの料理人だった。著書もある。丸山さんの心の扉を開きたくて、「大切にしている本ありますか？」と尋ねた。『料理の四面体』かな、と教えてくれた。大学生にその話をした。文化人類学の本でもあるらしいよとも付け加えた。「ボクは料理嫌いじゃない、思つてもみなかった」と言い、買つて帰つた。

定有堂は「読む会」という人文書の読書会を三十年以上つづけているので、その関連で概念性の高い本を求められることが多い。いま共通の心象風景は「分散」だろうか。結果、「このものの性」（個人性）そして当事者性が際立つてくる。個の属性がふくらみ「つながり」が粗になつてくる。一人一人の視野の解像度が上がり、ハイレゾリューション（高解像度）の状態になる。

こういう理解のもとに次のような本を店頭では話題に合っている。『〈責任〉の生成』（國分功一郎・熊谷晋一郎）、『つながりの作法』（綾屋紗月・熊谷晋一郎）、『新世の「資本論」』（斎藤幸平）、『はたらかないで、た

らぶく食べたい』（栗原康）の四点だ。

ある人が「コナトウス」という言葉が大事だよと教えてくれた。自由とか欲望の根底にある衝動のことだ。國分の功績は、意志と責任（レスポンシビリティ）のねじれを、応答（レスポンス）という形でときほぐしたことだろう。結論は「免責されたからメカニズムが解明され、引責が浮き上がる」という発見だ。ねじれは「責任」を成立させるために「意志」を後付けしたところにあつた。そしてこの作業は、当事者研究の熊谷晋一郎の立場と、はげしく共振する。

綾屋・熊谷の『つながりの作法』はとても面白い。「分散」の風景に光がさし込んでくる。アスペルガー症候群ゆえに「身体内外からの情報を細かく大量に拾いすぎてしまう」（解像度が高い）人と、脳性まひゆえにつながりにくい、正反対の二人の事例交換だ。健常者は解像度があらいいので、いかげんな「まとめ上げ」で平気であることができる。わたしたちはいま、閉塞状態の中で「分散」されハイレゾリューションとなった、新しい日常を生きている。ざっくりした「まとめ上げ」ができなくなつたおかげで、はじめて当事者問題をひとごとでなく実感できるようになつた。

もう一つ、ここ一年コロナ禍の中で、気候変動の危う

さが体感されている。そして同時に齋藤幸平の知見が注目を集めている。地球の危機が可視化されつつある今、もう身の丈の改善では間に合わない、社会の脱炭素化を目的に、脱成長コミュニティズムという未来を、つくり出すべきだという結論だ。一方、未来を信じないのが栗原康だ。心情的なアナキストで、身の丈感覚の人だ。東日本大震災という過去から時間が止まっている。しかしそこで見た「相互扶助」だけは手放さない。キリスト教的な一直線の時間意識と、東洋の循環の思想との対比だ。わたしは栗原の「ほどこしを感謝という見返りに変えるな」という一言に強く心をうたれたことがある。異オブレイディみかこのアナキズムの核心も「どうなるか分からないけど、それでもやってみる」という決断にある。

本屋で交わされるのは「ちいさな声」だ。未来を論じる場所でもない。出合いが、今日と明日を少し明るくするだけだ。どんな理想をかかげても、人間は必ず未来に過つものだ。今日をていねいに生きる「ちいさな声」を拾うのが本屋の「推し本」だ。

2021. 04. 17

(参考)

丸山伊太郎『アイデアとんぶり料理』徳間書店 1992

玉村豊男『料理の四面体』中公文庫 2010

國分功一郎・熊谷晋一郎『責任』の生成』新曜社 2020

綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法』NHK新書 2010

齋藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書 2020

栗原康『はたらかないで、たらふく食べたい』ちくま文庫 2020

定有堂教室「読む会」(岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室(会場 定有堂二階 葉香クラブ(荷葉))

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

# 真と善——「読む会」が求めてきたもの

岩田 直樹

(「読む会」選書係)

先日、定有堂店主の奈良さんから、思いがけない問いかけがあった。ちょうど春の高校野球県大会があり、準決勝で勤務校が負けた直後に立ち寄ったときだった。

突然、「読む会は、何を求めてきたのでしょうか」と奈良さん。野球モードから頭が切り替わっていない私は答えに窮した。

確かに選書係として、毎年、漠然とだがテーマを決めている。定有堂叢書『今月読んだ本から』シリーズも、今年で九冊目になる。小冊子のタイトルの中では、「復元力」を意味する物理学・工学用語が心理学へ転用された「レジリエンス」、レオ・オルデンバーグの概念「サードプレイス」(家、職場とともに私たちの生活を支える「とびきり居心地のよい場所」)などが気に入っている。となると、思考の「レジリエンス」を求めて、「読む会」を「サードプレイス」にしたかったのか。

その日のぼんやりした頭は思考停止状態に近く、それ以

上、考えは深まらなかった。

「読む会」は一九八八年に始まった。私が大学を卒業して、米子の高校に就職した年である。この五月で三九二回を数える。

創始者＝主宰者は故濱崎洋三先生(一九三六―一九六)。私の母校に数人いた名物教師の一人で、同窓の大先輩でもある。京都大学文学部史学科(国史専攻)に進み、母校に勤務。一九六九年四月、『鳥取県史』編纂のため県総務部広報文書課県史編纂室主任に併任され(八二年四月に現場復帰)、九〇年に鳥取県公文書館次長、九三年に県立図書館館長に就任し、九六年九月一三日、肝臓癌で死去。享年六〇歳であった。遺稿集として『伝えたいこと——濱崎洋三著作集』(定有堂書店、一九九八年)がある。私の卒業アルバムに濱崎先生の写真は載っているが、直接習ったことはない。

今でも鮮明に覚えているのが、先生の「最後の授業」である。参加者は、かつて一年八組に所属した教え子たちが中心だった。私は、職員兼同窓生として参加した(偶然にも、その前年度の一年八組担任だった)。徳永進先生による『伝えたいこと』紹介文の一節を引用する。授業内容は同書をお読みいただきたい。

「一九九六年八月十七日、午後二時、「起立！」と五十

代の元生徒が声をかけた。「礼!」。約百人の生徒が椅子に座った。夏季補習授業が始まった。

三十分の予定の補習授業は七十分となった。題にふさわしい話だった。目に涙を浮かべる生徒が多くいた。教室を出ると先生は言った。「途中から痛みが消えてな、この調子なら、冬季補習授業もやってみようか」。先生はその一カ月後に、他界された。」

『音信不通』同人の内田克彦さんに伺うと、「読む会」は当初「岩波新書を読む会」としてスタートした。毎月第一土曜日の午後三時開始であったという。『コンピュータと教育』『イスラム急進派』『日本語』『日本王権論』『文人類学への招待』などが最初期の本だった。

奈良さんと言う。「濱崎先生は歴史家であり、文献に立脚点があった。歴史家の視点から諸問題を論じるにあたって、現代思想を武器にしていた。先生が「読む会」を通じて求めていたのは、歴史の「真」に立脚した思想だったのではないかと。」

濱崎先生亡き後、いつからか私が選書係を担当している。現在の「読む会」は何を求めているのか。「善」ではないか、と奈良さん。今まで考えたこともない。少し驚く。

「善」について、思い当たる節がないわけではない。私の主たる思想的バックボーンは現象学やアーレント、ハバー

マスだが、古代・中世哲学の概説書や研究書を集中して読んだことがある。現代思想の「根っこ」を知りたいと思ったからだ。

私はアリストテレス『ニコマコス倫理学』の「賢慮（フロネーシス）」という概念が好きだ。「自分にとつてのいいことがら・ためになることがらに関し立派な仕方での思量しうること」。大学時代に「もぐり」で聴講したK教授のギリシャ哲学講義で教わった。さらには、スコラ哲学の「存在の一義性」「このものの性」（ドゥンス・スコトゥス）にも惹かれていた。

私が求めているのは「善」なのだろうか。そのあたりの論証は、与えられた紙幅では到底無理だ。昨日読み終えた山本芳久『世界は善に満ちている―トマス・アクィナス講義』（新潮選書、二〇二二年一月）の議論が傍証になるかもしれない。「善いもの」は、自らの卓越性や充実を自らのうちのみ独占することなく、自らを周囲へと拡散させていく。」

「善の自己拡散性・伝達性」による「肯定の哲学」―開かれたスコラ哲学」は、熟慮を伴う相互調整のプロセスである「反照的均衡」（ロールズ）、人々が相互の了解を追求、達成する「コミュニケーション行為」（ハバーマス）によって補完される。現時点の私は、そう考えている。

## 汽水のほとりから (2)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

『人新世の「資本論」』（集英社新書）が売れている。

昨年9月の発売から半年間で20万部を超える売れ行きで、新書大賞2021第一位も獲得した。著者の斎藤幸平は、この本が出る一年半ほど前、ドイッチャー記念賞受賞作『大洪水の前にーマルクスと惑星の物質代謝』（堀之内出版）を上梓しており、そのことは奈良さんから伺っていた。そんな経緯から、昨年5月、日本海新聞に掲載のリレーコラム「新型コロナウイルスと文明」の執筆者に彼の名を見つけた際、真つ先に奈良さんにお伝えしたが、その時点ではまだ彼がこれほど活躍するとは想像していなかったのである。

売れた要因には、タイトルの秀逸さもあるろう。「人新世」とは人類の活動が地球環境に変化を及ぼすに至った年代を区分する地質学の新しい用語だが、その変化は資本主義のグローバル化によって急激に進行し、今や気候変動を引き起こすに至っている。今回のコロナ禍も起こるべくして起

こった人災であり、その解決には資本主義をやめるしかない」と著者は言う。「SDGsは「大衆のアヘン」である」という冒頭の発言には、環境問題まで金儲けの具にしようとする資本主義の戦略に対する嫌悪が感じられる。

本書のテーマは「脱成長コミュニケーションズム」であり、加えてそれに伴う「コモン（ズ）」の再建である。「コモン（ズ）」とは、一般的に共有地を意味するが、この本の中で著者は水や電気など万人にとって有用かつ必要な使用価値及びその共同運営のことだとしている。そこには教育や医療といった重要な社会制度も含まれる。これはかつて宇沢弘文が説いた「社会的共通資本」の概念を想起させる。著者も両者は同じだとしながらも、自身の唱える「コモン（ズ）」は、資本主義の超克を目指す点で決定的に違ふとも言う。

ところで、「コモン（ズ）」については、その宇沢弘文が『社会的共通資本』（岩波新書）において興味深いことを述べている。自分が考える「コモン（ズ）」の最適な訳語は「社」だとするくだりである。宇沢は言う。もともと「社」は土を耕す意味で、耕作の神や土地の神も意味し、それらを祭る建物も指すようになった。やがてそこは村の中心となり、村人が集まって相談し、重要なことを決めるようになった。故に人々の集まり、組織集団も指す。最も小さな行政単位でもあるそれは「コモン（ズ）」そのものだ、

と。

ここで重要なことは、「コモン（ズ）」の起源が極めて古いという点である。これも宇沢が同書で述べるように、私有制でもなく国家統制でもない平等主義的な資源共有の共同体社会が古今東西至る所に存在したという事実は、マリノフスキーによるトロブリアン諸島の研究をはじめ、人類学者や歴史学者の手で数多くの報告がなされている。「コモン（ズ）」は、人類のプリミティブで自然発生的な組織のあり方に合致し、人間の社会性に適うものなのだ。

斎藤によれば、マルクスは『資本論』第一巻の刊行直後から自然科学やエコロジーの研究に取り組み始め、同時に非西欧や資本主義以前の共同体社会の研究にも取り組むようになったという。これらは、経済成長しない循環型の持続可能な定常型経済という観点で結びつく。その上で、晩年のマルクスが考えたコミユニズムは、「コモン（ズ）」の上に成立する「脱成長コミユニズム」だと断じている。かくして「コモン（ズ）」再建の必要性を説く斎藤だが、気候変動の対処には、インフラの整備や産業転換の必要性から、国家の力が欠かせないとする。アナキズムのように国家を拒否するのは愚かで、故にコミユニズムしかないと言うのだ。が、歴史的に見れば「コモン（ズ）」は国家に搾取されたり破壊されたりしてきた。斎藤も言うように、

「コモン（ズ）」再建の基礎となるのは信頼と相互扶助だが、それはむしろアナキズムに親和的な考えなのである。

斎藤もしばしば引用するデヴィッド・グレーバーという人類学者がいる。彼はアナキスト人類学という分野を独力で切り拓いたが、昨年惜しくも59歳の若さで亡くなった。彼は名著『負債論』（以文社）の中で、コミユニズムとは「各人はその能力に応じて『貢献し』、各人はその必要に応じて『与えられる。』」という原理に基づいて機能する、あらゆる人間関係だと規定した。それ故、誰かが溺れたり地下鉄の線路に落ちたりしたのを目撃した時、可能ならば助けようとする行動を「基盤的コミユニズム」と名付けた。

孟子の性善説の根拠となった、井戸に落ちる赤子を見て側隠の情が湧かない人はないという挿話を思い出させる内容だが、グレーバーが言いたかったのは、人間社会には道徳を基礎づけるものが本来的に備わっており、それ無しに如何なる社会も成立せず、逆に言えば、現実の社会には既に常にそれは在るということだった。信頼と相互扶助は人類史と共に古く、それは国家に頼らずとも可能であると示すための行動、それこそがアナキズムだと彼は言った。





この小説自体、未来に生まれる「あなた」（ともに異星人の言語を解読した物理学者との間に生まれ、若くして難病で亡くなる主人公の娘）に語りかける時点と、異星人と出会う時点、明らかに時系列の異なるものが前後交錯する複雑な構成になっている。読み手は大いに戸惑うが、それは主人公が習得した過去形も未来形もないヘプタポッド言語の為せる業である。

では、あらかじめ結末（娘を失う未来）の分かっている物語を生きることには、意味はあるのか。良い結末ならいいが、悪いものなら、はじめからない方がいいか。

◇

◇

◇

著者のテッド・チャンが伝えたかった同じ答えを、不思議なことに二千年前の古代ローマの哲学者、セネカが語っている。長いが引用する。

「あなたが彼を息子に持ったこと、彼を愛したこと、まさにそのこと自体が報酬なのです。『でも、彼はもつと長生きできたでしょうに』とおっしゃるのですか。そうかも知れませんが、そもそも彼という者を授からなかった場合を思えば、はるかに良い目に遭われたのですよ。（中略）たとえ間もなく去ってゆく幸福であっても、恵まれた方が恵まれないよりはるかによいのではないのでしょうか」

これはセネカが、息子を若くして亡くした知り合いの貴

婦人に宛てた書簡「マルキアへの慰め」の一節だ。

子を持ち、育てる、あるいは恋人や友人など、たとえその人を失うことがあっても、束の間でも愛する者と過ごしたことで、それ自体が人生の喜びであり、贈り物である、というセネカの教えが胸にしみる。

◇

◇

◇

主人公は「あなた」を産む人生を受け入れ、物理学者とベッドインする。「生まれてきた日のあなたをながめているとき、心が心に浮かぶ」（この不思議な言い回しこそ、ヘプタポッド言語なのだろう）。

結末はどうあれ、最後は「死すべきものとして生まれた」（セネカ）のが人間。それは私も、あなたも、逃れようがない。だからこそ一日一日、「今」を大切に、愛着を持って生きよう。この古代ローマの哲学者の呼びかけが、はるか未来のSF作家とリンクしていることに心打たれる。

きょうのお天道様の具合はどうだろう…晴れなら、娘の記憶を連れて近所へ散歩に出かけるのもいい。

## 結局「二」にいる日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

バナナどんな味?と聞いてみると、「つめたいあじー」ともぐもぐ答える二歳児。そうかー。つめたいは味じゃないうっていつ誰が決めたんだろうか。おとなになっても一口目のグラタンの味は熱いとしか言いようがない。口がそう言っている。甘い酸っぱいしよっぱいからい、全部口がそう言っている。つめたい熱いぬるいも、硬いも柔らかいも、全部口がそう言っている。

前の道路が春休みになった。縄跳び、一輪車、キャッチボール。常にさわがしい。かと思うと急に「もう帰ろっかな」とかいう。小学生のとき帰る時間ってどうやって決めてたっけ。暗くなったら帰ってたのか。誰かの親が呼びにきていた気もする。

一直線に走ってきて「あのすいませんこれお金とってくるんで買いますー」という男の子。なんかのついでとかではない。一回走ってきて、あるかどうか見て、お金取りに帰る。効率、とかいう言葉とは無縁の世界。どうにかしてずっとそのまま歩いてほしい。

一年前のチラシがくちやくちやになって置いてある。「一周年感謝祭」。ふるまいサーターアンダーギー、おとなは泡盛飲み放題、軒下ライブ、懇親会的座談会。ごちゃごちゃとした一日。今年はずかに鉛筆を作った。店名と「二周年」の文字を入れた。記念品です、とお客さんに渡すとカバンにしまってくれる。まつさらの鉛筆が一本、おとなたちの鞆の中に入っていくのを見るのはおもしろい。どんなカバンにもフィットしないサイズ。家に帰ってカバンを開けて鉛筆が入っていたらどんな気持ちになるのだろうか。筆箱はえらい。鉛筆を握りしめて走っていく小学生を見送るのはちよつとこわい。こけたらささるで。

奈良から本屋のSさんがやってきた。半年ぶりくらい。「今年引きこもろうと思ってるんですよね」という。なんちゃらマルシェとかどこそこの古本市とかのお誘いが増えてきた。一日だけだったり何週間もあつたり、店番

に行かなくてはいけなかったり、レジはお任せで良かったり。いろいろ誘ってもらったり誘ってもらえなかったりする。日程が重なると断ることもある。

いいイベントとはなにかと言われるとよくわからない。売れるかどうかと、その後に店に来てくれる人がいるかどうか、と大阪の本屋のSさんが言っていた。あと勉強になるかどうか。売れる催事を企画できる人はすごい。ちよつと真似できない。催事が終わってから店に来てくれる人もすごい。「看板と品揃え見てちよつと気になって」とかいふ。すごい。自分もでかい古本市には行っていたが出店している店にも行こうなど思ったことはなかったな。いいイベントというかいいいお客さんか。

奈良のSさんの「引きこもろうと思ってるんですよ」とは、それらイベントに出るのを控えようと思ってる、という話だった。「最近お店に来てくれる人がまた戻ってきたから」という。個人でやってる店はどこかに出店するときたいい店を閉めていく。そういう後ろめたさは常にある。店にきてくれるならそれが一番うれしい。そんな当たり前のことをうれしいと思うほどにこしばらくお客さんがいかなかった。「引きこもろうと思ってるんですよ」とはつまり、お店を大事にしたいということだと思う。そういう店主は何人もいる。ここ最近とくによく聞く。どつ

かのお祭り会場よりもこの場所にいたい。

定休日、交野に行つた。ずっと行きたかつた本屋に。イベントで一緒になることが多い先輩。出店が増えると店はほとんど開いていないらしい。店に入るなり「叱つて」と言う村上さん。怒つてほしいですよ。小さな、ごちゃごちゃと詰まつた場所だつた。例え週に一回しか開けていなくても、この場所を大事にしている。本屋に行くつてめっちゃくちや久しぶりだつた、と急に気づいた。バックヤードや裏の物置まで侵入して見学する。「いこか」とシャッターを下ろす村上さん。こじんまりした商店街を歩いてお好み焼き屋に連れて行かれる。さつき車の中でおにぎりを食べてしまった。オムそばくらいなら食えるだろ。答えのない話を延々とする。みんな迷っている。

## 桃と入学式、贈る言葉

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

入学式と言えば桜だが、今年は咲き始めが早く、式の頃には、散ってしまう場所が多かったようだ。

3月、何気なく目にした新聞のエッセイで山梨・甲府周辺の桃の花が例年4月に見頃を迎えることを知った。「朝もやに包まれた盆地のそこかしこに鮮やかなピンクの桃や白っぽい杏の花が咲き乱れていた」と、政治学者が、中央本線からみた風景を回想していた。

4月上旬、次男が入学する高校の入学式へ向かおうとしていたので、私も同じ風景が見たい、と思い18切符を手で吉祥寺から中央本線の鈍行に乗り込んだ。桃の色のあたるピンクが目に入り出したのは、勝沼ぶどう郷駅あたりからだったか。しだいに、あちこちで見られるようになり、線路脇すぐのところにも結構咲いている。武田勝頼が築いた国史跡の城跡が残る「新府桃源郷」周辺を散策。道ばたに咲く菜の花が、桃の花をいっそう引き立てていた。この

日は曇っていたが、晴れていれば八ヶ岳や南アルプスも望める場所だ。

桃の話はまだ続く。次男の入学式で配られた学年だよりのタイトルは「桃李成蹊（とうりせいけい）」。「人格の高い人の周りには自然と人が集まり従うことのたとえ」だが、学年主任が、子どもたちの成長を願ったという。そして、同じ中学から一緒に進学した友人の名は「桃」さんだった！



ここからは、入学式で聞いた校長の式辞から、新入生や今春新しいスタートを切る人たちへ贈る言葉を考えたい。

私立高校の入学式には初めて参加したが、校長の式辞は「何のために学ぶのか。会社とは何か」を問う斬新なものだった。冒頭、「本来、会社は一人ではできないことを、力を合わせ、社会的な活動をして、社会に貢献するための組織」と定義した。そして、世界で活躍する3人の起業家を挙げ、例えば、靴が1足売れる度に、買うことができないう子供達に新しい靴を1足贈るビジネスモデルを紹介した。学校での学びについて「学んだ分だけ、解決しなければならぬ課題が出てくる」として、「世界に大きな影響を与えるには、億万長者である必要は無い」というメッセージを贈った。

最近注目されている洪沢栄一も意識したのだろうか。コロナ禍で、多くの会社の業績が落ちこむ中だが、会社の本来の役割を考えさせられた。

だが、多くの高校生、いや大学生にとつては働くことはまだ、なかなかイメージできないことではないだろうか。校長の言葉を聞きながら、自分だったら、どんな言葉をかけられたらうれしいか、考えてみた。

まず浮かんだのが、写真家、星野道夫だ。著書「旅をする木」の中で、星野は若かりしころの挑戦を振り返り、こう回想している。「そして、もう1度あの頃の自分に戻れないか、とも思ったのです。つまり、目の前からスーッとこれまでの地図が消え、磁石も羅針盤も見つからず、とにかく船だけが出さなければというあの頃の突き動かされるような熱い想いです。そしてたどり着くべき港さえわからない新しい旅です」

高校生や大学生が何かに夢中になれた時は、想いのままに行動してみる。他人に多大な迷惑などをかけない限り、これで良いのではないか、と思う。

もう一つは、私が今の会社に入社した2003年4月1日に新聞掲載された東京大の玄田有史教授のエッセイだ。

「新社会人の君へ 働くことはかなしい、けれど」とい

うタイトルで、新たな環境でぶつかる「カベ」との向き合い方を書いている。「カベにぶつかったときには、無理に乗り越えようとするのではなく、その前でウロウロしていること。そうすれば、ぼっかり穴がみつかったり、カベが突然崩れたり、ヘリコプターが飛んできて誰かがロープを降ろしてくれたりする」という元テレビプロデューサーの話を紹介していた。

星野のように想いのままに行動できたら幸せだ。でも多くの人は新しい環境で、すぐにカベにぶつかるに違いない。そんなときには、少しは我慢してカベの回りであらうついてほしい。自分はいつもうろついている、何度もたれてきたロープに助けられているからだ。

## ケアとセラピーをめぐる II

松田 裕史

(高校教員)

以前勤務していた学校でこんなことがあった。

生徒Cは高校一年の途中から月に数回休むようになった。長期に欠席することはなく無事に進級できたが、不安をぬぐえぬまま次年度を迎えた。

4月。引き続き、2年生になったCの担任を僕は務めることになった。一年次と同じく、時々休みを挟みながら何とか学校生活を送る日々が続いた。しかし、7月に入りCはぱたりと教室に入れなくなった。小暑がまちかで近くの沼地では蓮が花開こうとしていた。

学校には始業の時間に少し遅れて来ることができるようだが、日中を過ごす場所は教育相談室になった。教室に入れなくなったその日以降、僕は空いた時間を見つけては教育相談室に通った。なぜ教室に入れなくなったのか、単刀直入に聞いても理由は本人にも分からない。それもそのはずで分かっているならばどうの昔に解決しているはずだ。どうすればCの不安を除去することができ、教室に入ること

ができるようになるのか、そんな思考ベクトルはいつの間にかやら消え去り、僕がしたことといえば他愛もない会話だった。世間を賑わせているニュース、身の上話、勉強で困っていること、中学校時代のこと、部活のこと、家族のこと……。しかし、一週間たち、いつものように隙間時間を縫って相談室の窓際に座っているCの隣に座るや否や、話すことが何もないことに気づいた。話題がないからと言ってCと顔を合わせぬわけにはいかない。僕はいったん席を立ち、自然と体が動くままに売店に向かった。少ない種類の中からいくつかスナックやスイーツを購入し、それらを携えもう一度、Cの隣に座る。おもむろにスナックのアルミ袋を開封し、食べるよう促した。Cは遠慮がちだったが少しづつ食べ始めた。僕も自分の個袋を開け、何も語らず食べる。不思議と気まずさはなく、むしろ温みのある時間が流れた。残ったスイーツは午後からでも食べるように言い残した。Cの表情は柔らかだった。そのようなことが夏休みまで3週間ほど続いた。

夏休みに入る前、休みが終わり2学期が始まれば教室に入りたいたいとCは訥々と語った。気持ちと身体の準備として、始業式の前日である十九日に一度、登校することをCに勧め、Cは頷いた。

八月一九日、Cは来なかった。

悪い予感がして、電話をしようと六桁の番号を押そうとする。五桁まで押したところで右手の人差し指が止まる。最後の番号は押せなかった。予感が現実になることが怖かったのだ。

二〇日、始業式の当日、式の前にある朝の会のために教室へ入る。

予感は外れていた。Cは何事もなかったかのように席に座っていた。Cはそれ以後、一度も休むことなく三年に進級した。

\* \* \*

今から振り返ると、Cが必要としていたのはセラピーではなくケアだったのだろう。学校でも、家庭でも何かの目標に向かって加速度的に突き進んでいくことを求められ窒息しそうになっていたのだと思う。教育相談室は唯一、ただそこにいることだけで誰かに認められる空間だった。東畑開人は言う。「なんだかんだ言つて、僕らにできることは「様子を見る」ことしかない。デイケアには魔法はない。事件を鮮やかに解決してくれる名探偵はいない。そもそも心の問題に特效薬はない。時間という効き目の遅い万能薬しかない。」Cが生氣を取り戻した要因として、保護者の接し方がセラピーからケアに変わったことも大きい。それは外から見るよりさぞかしエネルギーを必要とする、時に

は苦痛さえ伴う認識論的転回だったはずだ。

セラピーがだめだとか、必要ないなどというつもりは毛頭ない。例えば、僕は定金浩一先生(甲南大学)が提唱される\*「解決志向型面談」のワークショップを何度か受け、「面談」とは何かをよく理解することができた。面談にもゴールがあるべきで、ただ生徒とおしゃべりをして終わる面談はお互いにとつて有益な時間にならない場合が多い。「導入→展開→まとめ」という展開の中で生徒の問題点、困り感をあぶりだし解決に向けた言葉かけをしていく。設定時間は7分間。多忙な現場で多くの時間を面談に割ける状況ではない。その中で最適・最長の時間を定金先生は7分と設定された。ワークショップで模擬面談をやった際には7分で導入からまとめまでをこなすのは無理だったが、様々なフィードバックをいただき、また模擬面談を繰り返す中で7分に近づけることができた。

ただし、ケアを必要としている人に対して問題を解決してみせようと意気込んでみても肩透かしを食らうだけだろう。セラピーとケアの成分をどのように配合するのか、それを個々の相手によって変える。そう考えると、相手と同じであつても二度として同じ面談はない。そこには微小だけれど、一回性の物語が含まれている。

\*「解決志向型面談」の別名はブリーフセラピー。

## 沖繩プロボノ記⑤ 数学が繋ぐネットワーク

芝野 浩貴

(地球探究家)

ブラックホールが可視化されただけでなく、渦巻いているのも観測された。可視化だけならビッグパラボラの反射で高校生にも伝えることができるが、渦巻く状態はベクトルやテンソルを上手く利用しないと説明に窮する。だから、ツイスター理論なのか：

ある状態が観測できたら、それを説明できる理論を組み立てるのが科学の王道だが、ペンローズの場合は、アインシュタインが一旦否定した相対性理論を元に修正して、特異点の存在が避けられないことを示し、観測出来なくても存在は予想していた。ペンローズタイルという言葉を聞いたこともあると思うが、これまた非周期的結晶の存在よりも先に、幾何学的理論が先行して、後に観測されたのであるから、恐るべし数学者である。(昨年のノーベル物理学賞の受賞者だが、敢えて数学者と呼んでいる)ペンローズは、ホーキングだけでなく、エッシャーの図にも影響を与えている。(音信不通43号参照)

十数回を重ねてきた那覇でのプロボノであるが、数校の

学校を一気に回るのは昨年の9月、11月に続き3回目であった。今回は6高校訪問した。メイン講師のS哲人は今回の講義のモチーフに野老朝雄デザインの2つのエンブレムを取り上げた。オリンピックとパラリンピックのエンブレムは同じものから出来ており、見る角度により異なるように見えるのだが、それをどう繋がつているのかを見せるのが遊歴算家の見せ所である。専門高校の時はなるべく式を使わずに、進学校の時は証明も交えながら巡業した。私は導入として、御当地映画の「生きろ(島田勲)、佐古忠彦監督」について言及した。一年前は「菜の花日記」について話した。沖繩県民ではないが、私は桜坂劇場の会員である。夜間中学の問題から、沖繩戦で1945年の6月に多くの民間人が犠牲になったことなど、教育が歯止めにならなければいけないという思いで数学に絡めて話している。哲人も私もコロナ禍におけるオリンピック開催について反対であるが、エンブレムに罪はないし、地球が一つに繋がっているのは探究家としても扱いたい。なので、円の中に四角形が埋め尽くされているのを見てBコードの作り方を閃き、Cコードの読み取り方を正方形の切断線と見立てて、エンブレムの作り方を奏でる哲人の主曲の合間に間奏した。左は受講生徒の感想の一部である。

○ローリング・ソバットを使った図形にビビツときた。



遠いところをわざわざ来ていただきありがとうございます(ざい)ました。

○数式を使わない解き方が知れたし、歴史も学べてよかったです。

○学ぶことが身を守れることを知りました。

○苦手なことがあっても、絶対に超えてやる、という気持ちが大それたと思つた。

○根拠まで含めて理解することが基礎学力を作る学びだとわかつた。

○先生方二人が楽しく話されるので、笑いあひの授業で面白かつた。こんな大人たちがいるのかとびっくりした。

(平素のクラスでは浮いているADHDの男子生徒が、講義後に私に歩み寄つて声をかけていたことにびっくりして、參觀されていた校長先生から丁寧な生徒の感想をいただいたのである)

改築が終わつたばかりの首里高校も訪問した。皮肉にも復興がまだまだである首里城の代わりに、那覇市内で一番高台で見晴らしのいい場所になっていた。近くにオイラー食堂(仮称)があると知り、寄つてみたら新たな出会いがあった。精神科医の横田泉氏(『精神医療のゆらぎとひらめき』(日本評論社)などの著者)がオーナーで、フード支援

や子ども食堂も意識して、飲食店経営をサポートされている。60歳を超えて数学に目覚めたそうだ。メニューにもオイラーのことが書いてある。「数学の定理が美しいように、美しい料理を目指しています」と。夜は有理数と無理数の違いを図や連分数で論じて盛り上がった。学びの機会を与えているG塾を経営するNさんの飲食店でもプロボノ数学家は集まる。(音信不通40号参照)N弁護士は、大きさ、速度、重さ、気持ち、言語、表情などを数量化して、パワハラやモラハラやセクハラの度合いを測れないかとプログラムを考えている。(まさにペンローズの『心を量子で語れるか』、津田一郎氏の『心はすべて数学である』の世界)塾講師で中国人留学生のK君は日本の学生が勉強しないことを嘆きながらも「最適化」の研究を深めて新しいエネルギーの作り方を模索していた。

高校勤務時代に、数学者の志賀浩二氏をお招きした時の次の言葉を思い出した。三名に一人は60歳以上となる時代が来るが、そういう人たちに数学を啓蒙しなければと思つている。当時80歳であつた先生は今も健在で、2日間で15時間生徒や先生方に講義をしていただいた。数学家としての社会啓蒙への系譜として、臨床心理学を立ち上げた河合隼雄、社会的共通資本の宇沢弘文、現代数学、の創始者森毅などがいるが、彼らが私の活動を支えている。

# 八代日記

(十四)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

四月某日

今月は久しぶりに東京に行つてバンドの練習に参加しようと思つて飛行機も押さえていたのだが、コロナウイルスの感染者がまたも増えてしまつて、蔓延防止なんかかかんとかが発令(?)されたことにより断念。当面また行けないのだろうか。マンボウのため、飛行機のチケット代は全額帰つてきた。

四月某日

サッカーの話です。噂されていた欧州スーパーリーグ構想などという下品な企てが発表された。構想に含まれていないクラブやサポーターだけでなく、構想に含まれているクラブの監督や選手たちからも大きな反発が起こり、発表からわずかの時間でほとんどのリーグ構想参加予定クラブが加入の撤回宣言をした。しかし違約金が発生するために正式な脱退ではないのではないかとこの噂もあるようだ。火

種は未だくすぶっている。

コロナ禍によって多くの収入が失われているのはわかるけれど、一部のエリートクラブ、というよりもサッカーと地域の文化的価値を省みない一部の資産家に主導された構想はまさしく分断を生むものだっただろう。よくもまあこんな強欲さをむき出しにしてきたもんだと怖くなる。

しかしものすごい金持ちでなんで庶民の考え方がわからないのだろうか。わからないからこそ金持ちなんだろうけど。

そんなことを考えながら某大型複合商業施設に納品に向かった。ここは高級マンションが併設されており、一般客向けの駐車場に向かう途中に居住者用の駐車場があるのだが、停まっている高級車や住人がとても威圧的に感じてエネルギーを消耗する…。しかしここだってスーパーリーグ構想の主たちからみれば大したことはないのかも知れないと思ひ、ひがみ根性の抜けない自分の溜飲の下げ方に悲しくなる。しかしスーパーリーグという名前も間抜けというか何というか。

(欧州スーパーリーグとは? レアル・マドリーが率先するビッグクラブ団体が主導となり、選ばれた一部のビッグクラブのみで行う新たなリーグ。かねてから水面下での構想が伝えられてきた中、2021年4月18日、12のビッグ

クラブの合意の下での創設決定が発表された。しかし、実質的にチャンピオンズリーグに取って代わる大会となるだけに、同大会を主催するUEFAなどが反発。英・西・伊のリーグサッカー協会もUEFAの姿勢を支持している。CJや各国内リーグの参加資格はく奪だけでなく、選手の国際主要大会参加に関わる処分も示唆されているため、実現可否は不透明。ビッグクラブ団体とUEFAがどのように折り合いをつけるのか、今後の情勢が注目されている。そしてその後、一部クラブが利益を独占するような仕組みに対し、ファン・サポーターを中心とした猛反発もあって続々と離脱発表がなされており、早くも瓦解の様相を呈している(『Goal.comより引用。』)

四月某日

ツイッターで見た写真。書店の棚に「新刊本はメルカリで意外と高く売れる！」というポスターが貼ってある。ツタヤとメルカリが運営(?)しているらしい「3秒チェック」というサイトに飛んで、「本のバーコードを読み込む」と「メルカリで売れる相場がわかる!」と解説してある。嘘だと思ったがほんとうに3秒チェックは存在していて、「売ったお金でまた新刊を買おう!」とか「メルカリでは発売3ヶ月以内の新刊が定価の平均8

0パーセントで売れます!」とか書いてある。何なんだこれは?やばくないですか。行き着くところまで行ってしまったというより、どこかに通り過ぎて行ってしまった感じ。そもそもツタヤにも利益がないんじゃないだろうか。

ちょうど手元にあった金井美恵子の「タマヤ」と谷口ジローの「歩くひと」のバーコードを読ませてみたが「スキャンした本のデータが見つかりませんでした」とのこと。まだ侵食され切っていないのかも知れない。どうなることやら。

四月某日

緊急事態宣言がまた出た。また東京に行けない。オンラインピックが始まったら期間中も行きづらそうだし、秋くらいまで無理なのじゃなからうか。

仕事は儲からないが忙しく週に一度休めるか休めないかくらいだが今日は休めた。子どもと散歩してシロツメグサを積んで、義妹にブーケの作り方を聞きに行き一緒に作って遊んだ。子どもは「つくって」を上手く言えなくて「くつつて」と言う。いつ頃上手く言えるようになるかな。

## 桃源郷あれこれ

### ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

シャングリ・ラ、ザナドゥ、ブリガドーン、或いはトウレ、ヴェーヌスベルク、オフル、アヴァロン……バンドの名前ではない。飲み屋の屋号でもない。皆、地名である。それも、実在しない伝説の、或いは創作上の。

シャングリ・ラは、近年、チベットの中甸県が香格里拉市と改名したため実在の地名となってしまったが、元々は、ジェームズ・ヒルトンの小説『失われた地平線』に描かれた、奥深いチベットの山懐にある鄙邑。ラマ寺院のような宮殿を中心に、誰知られることなく、二百年以上、そこにある。人々は長命で争いもなく平和に暮らしている。風俗習慣の大方が中国風でありながら、実は……という辺りがミソだが、作家の筆致は、入れ子式の構造と言いい、綿々と続く脇筋の描写と言いい、いささか十九世紀的ではある。戦間期の作品のため、世界情勢に対する作者の危惧を色濃く反映しているが、ファンタジーとしても、冒険小説としても面白く、過去、二度、映画化されているのも、そういつ

た魅力があるからだろう。

最初の映画は、一九三七年の公開。監督は、フランク・キャプラ、音楽がデイミトリ・ティオムキンだった。主演は、ロナルド・コールマン、ジェーン・ワイアット、と言われても残念ながらピンとこない。(コールマン髭の御本家らしい)登場人物や設定に多少の変更はあるが、ストーリーは、ほぼ原作どおり。

冒頭の騒乱の中国からの脱出行、飛行機のハイジャックなどは仲々の緊迫感で、全尺の四分の一を占める。その後の、シャングリ・ラは、ポタラ宮のような蒼古とした僧院かと思えば豈図らんや、これが見事なモダニズム建築。当時の最先端である。内部もモダンで統一され、デザイン・センスが素晴らしい。アカデミー賞の室内装置賞受賞も納得である。白黒で、一三二分の長尺ながら、丁寧な造りで退屈させない。

そして、一九七三年に鳴り物入りで、ミュージカルとしてリメイク。音楽はバート・バカラックが担当した。

全てアメリカ国内で撮影されたと言いい、オープンセットの規模は「クレオパトラ」以来とも。色彩は豊かだが、セットは書割じみており、風俗も南米や東南アジアの混

滑、そこへアメリカ風のミュージカルだから、木に竹を接いだ感が強く、原作の神秘的な味わいもあらばこそ。リメイクに傑作なし、のジंकウスどおり、散々の興行成績であったという。「二度行けば退屈しちゃう桃源境」とは双葉十三郎の評。

ザナドゥは、コールリツジの譚詩「クブラ・カーン」に出てる都。フビライ汗の夏の都があった場所で、上都と書く。マルコ・ポーロの『東方見聞録』に詳しく報告されており、広大壮麗な宮殿があった。しかし、汗は、川が流れ、野生動物が放し飼いにされた野原のような庭園の中に、竹で編んだ宮殿を作らせ（ゲルのことだろう）、専らそちらを好んだという。ノマドの王らしいエピソードだ。

しかし、欧州人には大理石と黄金で造った宮殿の方が魅力的だったようで、マンデヴィルは『東方旅行記』で、マルコの記述をそのままパクった上、御丁寧にならんと大都會取り違えた。前出の詩人も夢の中の歓楽宮に幻惑され、正しくは「ザンドウ」（中国音はシャンドウ）と書くべき所、誤記して「ザナドゥ」としてしまった。

かくして、この名前は独り歩きして、「夢のような、華麗で贅沢な場所」(OED)を表す代名詞となった。今日なお、エンターテインメントの各ジャンルで、頻繁に使わ

れているのは周知のとおり。我が国の一定年代層には、「キサナドゥの伝説」というザ・ジャガーズの歌謡曲が記憶されるが、これも英国バンドのカバーである。

ブリガドーンは、戦後すぐのブロードウェイ・ミュージカルが原作（アラン・J・ラーナー台本、フレデリック・ロウ音楽）で、一九五四年に映画になった。ヴィンセント・ミネリ監督、ジーン・ケリー主演である。

スコットランドに、百年に一度だけ、霧の中から姿を現す村があった。かつて、魔女が跳梁した時代、これから逃れるため、牧師が神に祈り、霧の中に隠したという伝説の村である。二人のアメリカ人が、ここに迷い込み、娘に恋をする。

ファンタスティックな道具立ての、他愛のない恋愛ミュージカルではある。衣装やダンス、音楽などがスコットランド調であるのは、アメリカ人のルーツに訴えたものか、単に異国情緒を狙っただけか。

私見ながら、この映画は、あの「ポーの一族」（特に最初期の「ポーの村」）の設定に一役買っていると思うのだが、如何であろうか。

## 鳥取あれこれ その五十七

内田克彦（地域研究家）

山根敏子は、一九五〇年四月に日本で最初の女性外交官に就いた人物である。その父親である、山根甚信（じんしん）は、『鳥取県人名鑑』（一九三〇年刊）によると、一九八九（明治二二）年一月鳥取市湯所町に生まれ、一九〇七（明治四〇）年に鳥取県立第一中学校を卒業後、札幌農学校を前身校として創立されたばかりの東北帝国大学農科大学予科に入学、三年後に畜産科に進み、一九一三（大正二）年に卒業して同農科大学助手になり、一九一八（大正七）年に北海道帝国大学農学部助教授に就任している。

川上みち子編『赤脚子』（牧野出版、一九七九年刊）の中の牧野和春著「川上貞夫 略伝」に、次の記述がある。

明治四四年（一九一一）、鳥取県立中学校に入学（略）在学中、彼は川上家の親族にあたる鳥取市湯所、山根家に下宿しました。山根甚信（のち広島で短大学長に就任）は北大の学生であり、有島武郎は当時、北大にいましたから、帰省する山根をとおして有島の話も聞いたはずですし、また山根がドイツ人教師から入手した泰西名画つ

きのカレンダーを川上は貰い、これによって彼は初めてセザンヌやゴッホの名を知ったのです。

『有島武郎全集 別巻』（筑摩書房）の「年譜」によると、有島は一九〇七（明治四〇）年二月に同農科大学の英語講師、翌年六月からは予科教授として、一九一五（大正四）年三月に辞職するまで在職している。従って、甚信は有島から教わったのであろうが、具体的にはよくわからない。

『全集』に名前が出てくるのは、甚信の四年後に松戸中学から入学している本橋平一郎である。本橋著『笹舟』によれば、「在学中および卒業後札幌にいるあいだ有島武郎教授の薫陶をうけた。」本橋は、一九二二（大正一〇）年に創立されたばかりの鳥取高等農業学校教授に就任、翌年校歌作成を依頼され、三年間の海外留学の直前に、郷里の松戸で「初稿と作曲をおえ」、「校歌の初稿は有島武郎先生の校閲をうけ、また作曲の初稿は田村虎蔵先生の校閲をうけて、鳥取へ送った。」このため、有島の最後の講演旅行となる一九二三（大正一二）年四月三〇日の鳥取高農での講演（「年譜」では、「鳥取高農で教職員と懇談し」とある）時には留学中であった。

さて、甚信の札幌時代の一九二二（大正一〇）年に、敏子は生まれた。このためか、『週刊FLASH』の昨年1月24号の、「47都道府県「おらが村の女偉人伝」シリーズの中では、「北海道・山根敏子／日本で初めての女性外交官」として紹介している。（因みに、同誌は同年の12月8日号で鳥取県を取り上げ、「碧川かた／赤とんぼの母」は女性運動家」を紹介している。）

甚信は、一九二六（大正一五）年文部省在外研究生としてドイツに留学し一九二八（昭和三）年帰朝、一九三一（昭和六）年八月台北帝国大学教授に任ぜられた。このため、一家は台湾に移っている。その後は、『日本人名大事典 現代』（一九七九年刊）によると、理農学部長をつとめ、戦後台湾大学農学院教授となった。

そして、戦後三年を経て台湾を引き揚げることになる。その後の事については、甚信が亡き敏子を偲んで編纂した『去りぬるを』に詳しい。要約する。

妻と娘の敏子とともに、一九四八年二月一〇日に、佐世保に上陸した。迎えてくれたのは、丁度二か月前に

シベリア・イルクーツクから復員して鳥取にいた、長男の乙彦である。汽車の旅を続け、同月一七日に鳥取に帰還した。

幸いにも翌24年1月21日、敏子が〔略〕鳥取県教育委員会に就職することが出来、又長男が鳥取大学助教となったので、親が子の脛を齧って凌ぐこととなった。

山根甚信について、『新・人国記 ④』（朝日新聞社、一九六三年刊）には、次のように書かれている。

〔鳥取大学初代学長の佐々木喬と〕鳥取一中の同級で東北大〔ママ〕を出た山根甚信は、広島大の水畜産学部長から、広島農業短大の〔初代〕学長になっていま十年目、馬、ウサギ、鶏の人工授精の研究が有名。次女の敏子は婦人外交官になったが、先年アラスカで航空事故のため、惜しくも亡くなった。

甚信は、一九七二年三月に亡くなり、現在、甚信夫妻は次女の敏子と長男の乙彦夫妻とともに、鳥取の地に眠っている。

# 不条理のメルヒェン

武中淳彦（秦阜梅林 本名）（楽人）

## 序

無教養を地で行く筈の孤独な王様、ハムレットを騙り、終ひにはリヤ王の如き独白を繰り返す：聞きよくに依つてはエラく含みのある、矛盾を孕む台詞。いつたい誰に・そして何処に向け、いつの時代に合わせて呟かれたもの？先月、つか作品※<sup>二</sup>で少々「解りにくさ」の物議を醸した鳥劇の最新作。（寺山修司が潤色した版であるが、）対照的にストーリーは「解り易い」事此の上無い、誰もが知るあの寓話：「裸の王様」※<sup>〇</sup>

## I

幼い頃愛読したアンデルセンの原作※<sup>一</sup>は、文庫本で二〇頁に満たない掌編、其れにしては情報量がふんだんで多くのアーティストの想像を逞しくさせて来たさすがの名作、寺山の深読みが冴る。此れは幾つかの音楽劇※<sup>三</sup>を除いて、鳥劇初の「ミュージカル作品」：中島演出では今あの手この手、舞台上に立体化・ヴィジュアル化を試みている…

## II

他の役者、スタッフに先駆け雪の降るクリスマスから台本

片手に僕は、樂の試みに心砕いて来た。質、量共に来鳥以来最大級の膨大なスコアを要求され創意工夫を凝らして。今回は、先年の「ニッポンチャチャチャ」（如月小春原作）に続き、売れっ子の渋さ知らズさんをお迎えし、彼らが拙作にポップなアレンジを加えて下さる形、演奏では僕もバンドに乱入、生演奏が芝居と共に舞台を彩る…

## III

♪「人は見かけによるものさ」と歌い、徹底した唯物論を唱うる王様。見えなぬものの存在と意義を訴える側、排除する側の登場人物。両者の対立はやがて価値観の本質を巡って発展、拡大化する。権力者に媚び諂う為自らの保身や見栄の為見えもしないものを見えると言ひ張るスノッブ達、その声が大きくなればなるほどマイノリティ、真実の声は片隅に追いやられる：亦、自分の内側に向け哲学問答が♪「なぜだろう？」と繰り返される：果たして単純明快な解り易い物語りだけが真意を語っているのだろうか！無垢と無知、解り易さ、解りにくさとは、抑なんだろう…？

## IV

寺山は「実際、私達の周辺には、目には見えないものがあり乍ら価値を持っているものが少なからずあり、さうしたものを全て「見えないから役に立たない」と述べて了つたら、文化など一塵の灰に帰して了う」と危惧し「見え



ない」ものを「見える」と云い張るスノップ達を「解りもしない」現代音楽を「感動的」「素晴らしい」と褒めそやす輩となんらかわらないと揶揄し、更に「王様は、何も着てないや」ゲラゲラ笑った子供を「思えばシラける話」と一蹴、「万人に見えるものが、なぜ自分にだけ見えないのか？」反省してみる謙虚さの無い、我儘勝手な自己顕示欲の持ち主だったに過ぎない、と云うのが此の童話の結末である、と結んでゐる※4。

## V

♪「王様は何処にいる」♪「オオツさまは…」♪「喪服の歌」…カリカチュアライズされたコミックソング、♪葬送行進曲♪「ガーベラの騎士のワルツ」と云った器楽曲…書き卸した僕のスコアは実に20を超え全編を啞い飛ばさんと埋め尽くして…其処から、何かしら考えて欲しい…いったい寺山は何を訴えたかったのか？物語の矛先が、いつの間にか登場人物から客席に陣取っている貴方へとスライドし、啞いが尚続いてゐる…此れは、怖ろしさを纏った話かもしれないよ、もしかしたら？…コロナ禍、オリムピックイヤーの現在を浮遊する2021年春の日本…鳥の劇場は、「費用対効果の上がらない」、まさに地方文化にあつて役に立たなひデクノボーと見做され(中央の大きな助成から外され)今、存亡の危機を迎えてゐる…

2021.04.19.

※0 鳥の劇場 GW 公演「裸の王様」 於 鳥の劇場

2021年5月1日(土)～5日(水)、7日(金)～9日

(日) お問合わせ 0857-843268

※1 同劇場2月公演「戦争で死ねなかったお父さんのために」つかこうへい作

※2 (≡今月の一冊) 完訳アンデルセン童話集1 大畑末吉訳岩波文庫(「皇帝の新しい着物」を含む) 岩波書店刊

同 童話集 山室静訳 角川文庫 角川書店刊

※3 「兵士の物語」I. ストラヴィンスキー「三文オペラ」

B. ブレヒト/K. ヴァイル等の音楽劇

※4 寺山修司「ぼくが狼だった頃」さかさま童話史」文春文庫より

「今月の一枚」Ed. グリーク「君を愛す」作品5(2)(1864)  
(HC アンデルセン詩) ① Hr. プライ Bar. L. ホカンソン Pf. ② K. フラグスタート sop. M. サージェント指揮 BBC 交響楽団 (ライブ盤)

イラスト 秦阜 梅林



## 理解されるよりは理解すること

— 「隣人愛」と私

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

「やさしさ、思いやり、人に尽くすこと」  
その言葉が鎖のように私の人生に絡まっている。

教育とは偉大なものだ。高校を卒業して十年近く経とうとするのに、キリスト教の「隣人愛」から派生したこの標語が私の頭の中に何度もこだましている。「私はきつと人に尽くし続けるだけの人生なのだろう」とか、「こんなことをして本当に思いやりのある人間なのだろうか」とか。

私は大学で受験をするまで、カトリックの教育を受けてきた。家はキリスト教徒ではないし、私自身も洗礼は受けていない。だが、ミツシヨンスクールの独特の空気というのは、懐かしいものだ。先生に挨拶をする前にお祈り、体育祭でも学園祭でもお祈りから始まるし、始業式ではなく、始業ミサが存在した。

そんな祈りの生活の中で印象に残っているものがある。マザー・テレサが好んだ祈りに「アツシジの聖フランシスコの平和の祈り」がある。実際には聖人自身の手によるものではなく、二十世紀初頭に生まれた祈りだと言われている。

「神よ、私を平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、争いのあるところにゆるしを、分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を、誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を、闇に光を、悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、私が求めますように。

私たちは与えるから受け、許すから許され、自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですから。」

この祈りを唱える時、私の考えはいつもあの三つの標語に考えが戻っていた。「私は「平和の道具」となっているのか」「他人のやさしさや思いやりを求めただけにならず、自ら行動できているのか」「ひとに尽くすこと」

で、「悲しみのあるところに喜び」をもたらしているのか」と。

ただ、今この祈りを見ると、「平和の道具」としての我々の意志は、神の考えが顕れたものにすぎないとも感じる。私たちは、果たして「悲しみのあるところに喜び」をもたらしているのかなどあずかり知らぬまま、その生涯を終えることもあるだろう。我々のいる世界は、因果関係で割り切れるような世界ではないのだ。

『「利他」とは何か』（集英社新書）を読んだときに私が考えたのは、そんな私が教え込まれた「利他」の精神のことだった。

話題になって一冊ではあるが、投げ込まれる世界はそんなに単純明快な内容ではない。五人の識者達が、それぞれの視点・学問分野から「利他」というテーマを語る故に、具体的な内容はそれぞれにかなり違う。

それでも私が感じ取ったのは、他者との関わりは多くの場合、1+1=2のような単純明快な式では表現できないのにも関わらず、現代の我々がその考え方に目の前の事象を押し込んでしまうことである。「こうすれば、こう考えるはずだ」という鑄型にはめ込むことでコミュニケーション

ンは楽になる。これだけ多くの人と会わなければならぬ現代人なら、そのようなコミュニケーションの省エネは仕方がないかもしれない。だが、「こうすれば、この人はこう考えて楽になるはずだ」という思いに、一点の曇りが必要なのだ。

私の思いは巡り巡って、それこそ「神」の思う「平和の道具」としての私の動きになることもあるだろう。だが、私たちが「した」あるいは「してあげた」などと思っていないことが、必ずしも自分の意志だけでできたものではないこと、その因果関係が常に自分に跳ね返ってくるものではないことを受け入れねばならない。

いざ自分が教える側になると、「これだけやっても届かないのか」と思うこともある。だが、一方で皆が皆「わかりました」「ありがとうございます」と口を揃えていることが、本当の子供達自身の成長なのか。その一方で「どうせ変わらないから」と私自身が理解する努力すらやめるのは正しいことなのか。

私の思いは巡り巡って実になることもあるだろうし、ただ漂うだけのこともあるだろう。たとえそうだとしても、「理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを私が求めますように。」

# 同じ空

蟹の日々(一)

新居戸メモ

(ドツベルゲンガー)

「組織検査の結果は悪性でした。つまり、がんです」  
三月三〇日、水曜日。新年度を数日後に控えた春の日のことだった。

この話をしようと思うと、そこに至る過程を少し語らなければならぬだろう。

三月下旬にちよつとした手術を受けた。これ自体は何とすることも無い手術だった。数年来の貧血がいよいよひどくなり、「このままだと輸血が必要になる」と迫力のある女性医師に脅されて、重い腰を上げて治療を始めたのだった。術前の準備的な治療として週二回の注射に通うのが少々大変ではあったし、麻酔が合わない質で目覚めてから目まいと吐き気に七転八倒したが、手術は目論見どおり年度内に終了。頻繁な病院通いもめでたく卒業して、この日は術後一週間の気楽な経過観察のつもりだった。……だっ

たのだ。

「仕事の事情もあるでしょうが、命が最優先ですよ。紹介状を書きます。すぐに治療を始めてください」

検査結果の詳細について、今後の受診と治療の流れについて。こちらの反応を確認しながら、医師の説明は続く。そうか、がんか。聞きながら思う。まったく予想していなかったわけではない。ほとんどの悪い展開についてひととおりに考えを巡らせておく性格なので、検査結果が悪性である可能性も脳の片隅にちらりと浮かんではいた。とは言うものの、主治医も「まずないとは思う、もちろん医療に絶対はないけれど」という見解だったし、自分自身も隔年の人間ドックでも何ら問題なく、年齢的にも大丈夫だろう程度の認識でいた。なのに、元祖消費税程の確率を引き当てたのだ。お年玉付き年賀はがきですら切手シート以外当選したことのない自分が、よりによってこの時に。

ふと主治医の背後に視線をやると、いつも注射をしてもらいながら笑い話を交わした看護師の女性の顔が強張っている。ああ、この人は若いのだな。本筋から外れたそんな感慨が浮かんだ。

視線を反対側にそらした先には、白い壁に掛けられたカレンダーがあった。よく小説やドラマでは告知を受けた患者がショックに泣き崩れているし、「頭が真っ白になっ

た」「目の前が真つ暗になった」という表現をしばしば目にする。しかし、いざ自分がその状況に置かれてみると、視界は白くも黒くもなかったりはせず普段どおりで、ただカレンダーの日付が白い背景にくつきりと浮き上がって見えた。

三月の暦は残すところ二日、四月はもう目の前だ。それは、二日後には新年度という大きな区切りが迫っていることを示している。ふつふつと泡のように胸の内に生まれてきた感想のうち、もっとも最初に感じたのは「これはなかなか面倒なことになったぞ」というものだった。

説明が終わり、これまでの治療の礼を告げて診察室を辞する。気楽な経過観察のつもりで荷物を置いて職場を抜けてきたので、また戻らねばならなかった。清算を終えて来たルートを戻る。

そうか。がんか。バスを降りて職場へ続く坂を登りながら、もう一度声には出さずに呟く。見あげた坂道の上にもいつもと同じ風景が見える。坂の上に立つ校舎。道の脇にあるグラウンドで部活動をする生徒たちの姿、聞こえてくる元気な声。城跡に咲く桜は今が盛りだった。きつと十日後の入学式を待たずに散ってしまうのだろう。

考えなければいけないこと、しなければならぬことが

沢山あった。新年度から、職場では五年間にわたる新たな事業が始まる予定になっていた。また、自分自身も久々の学校勤務に右往左往した初年度を終えて、ようやく目指すものが見えてきたところで、それに向けて取り組んでいく年になるはずだった。

けれど、変わってしまった。四月からの予定も、今後の生活も、そしてこれからの人生も、大きく変わる……変わらざるをえないのだということがわかっていった。自分を取り巻く世界は何も変わっていないのに、ほんの数分でわたし自身はまったく別のものになってしまったのだ。

考え事をしながら歩く靴先に桜の花びらが舞い落ちる。誘われて仰ぎ見た空は晴れていた。先刻までと何も変わらずに青く。この青さとあのカレンダーの白さをきつと忘れないだろうと思った。



Watercross

# 猫

あきの素生

(くうねるめがね)



猫派大派のどちらかと問われれば、猫派、好きな動物はと問われれば、猫、と答える子どもだった。一度も猫を飼ったことがなく、仲のいい友達や親せきの家でしょっちゅう接するといった機会もなかった。道端でたまたま出会った猫が体をすり寄せてきてうれしかったとか、ちよつと撫でさせてくれたとか、そんなささやかな触れ合いの中で、猫が好きだなあと思うようになったのだったか。

初めて飼った生きものは亀だった。子どもの片手に乗るような小亀。名前はピーちゃんと呼けた。小学校に上がるか上がらないかくらいのことだ。水槽を洗ったり、ピーちゃんを洗ったり、小さなつぶつぶのエサをあげたり、弟と二人で世話をした。ピーちゃんは、首をにゅうつと伸ばしてそのエサを食べる。プラスチックの水槽をかりかり引つ掻く、水の中で空気をぶく、ぶく、と吐く。ピーともプーと

も言わないピーちゃんの立てる、小さな小さな音なんか、今でも記憶に残っている。

次に飼ったのは、どじょう二匹である。川釣りのエサになる予定だったのが、それを免れて、わが家のペットとなった。どじょうは基本的に水槽の底で、敷かれた砂利を吸い込んだり吐き出したり、その中に潜ったりしていた。二匹が寄り添っていることもあったし、一匹が砂利から顔を出し、もう一匹が離れたところで尾っぽを出していることもあった。どじょうの食べ残しを金魚が食べるという情報はどこから得て、祭りですくった金魚も飼うことにした。実際には、金魚の食べ残しをどじょうが食べていた。金魚は三匹が長く生き、体長二十センチほどまで成長した。オレンジ色の鱗を持つもの二匹と、黒い出目金。そして古参のどじょうたちが、口をばくばく動かしながら、水槽の中でゆらゆらしていた。エサの入った缶を振ると水面にやってきたりもする。直には触れないけれど、ただ鑑賞しているだけでもなくて、そこにはやっぱりペットだとか、家族だとかの愛着があった。

どじょう、金魚を飼い始めて二、三年経った頃、シマリスがやってきた。初めてのもふもふした動物だ。ちな

みに男の子である。幼なじみの家で飼っているリスが子どもを産んだので、もう一人の幼なじみと私が一匹ずつ譲り受けたのだ。少し大きくなってから引き取ったからか、なつくことはなかったが、ケージ越しにひまわりの種を差し出すと、ためらうことなく、いくらでも受け取った。そして、小さな前足と小刻みに揺らす歯で器用に殻を割り、口に含む。ケージの中には家の形をした巣箱があつて、そこに細長くちぎった新聞紙を敷き詰めて寝床を作っていた。両のほっぺいっぱい詰め込んだひまわりの種は、その新聞紙の下にでも貯め込んでいたのだろう。たまのごちそうは、クルミ。ギターのピックのような形の薄い金属片をくぼみに差し込み、ひねってクルミの殻を割る。せつせと殻を割りながら、クルミ割り人形に興味を持ったのをぼんやり覚えている。

兄弟のリスに会わせてやろうと、ケージごと幼なじみの家に連れて行ったことがある。そこで、うちのやんちゃ坊主は脱走を図った。私たちの家から少し行けば、山に入る。姿を見失い、半泣きで幼なじみの家の周りをぐるぐる探した。もう諦めるしかないのかな、と肩を落としたところに、濡れ縁の下に隠れているリスを見つけ、無事に保護することができた。今思い返してみても、あんな小さな生きものをよく捕まえられたなと思う。くじ運なんかはよく

ない方で、その分貯まっていた幸運がこういうときに活かされているんだとしたら、白い玉しか転がり出ないくじ引きも悪くない。主の帰ったケージを抱え、安堵と罪悪感で放心したまま家路に着いた。

ことほどさように、猫とは縁のない人生だった。にもかかわらず、いやだからこそ、猫は変わらなぬあこがれの存在だ。粗忽さゆえか、あまり猫に好かれる性質ではないと感じているが、それでもごくごくたまに近寄ってきてくれたときには、少しだけ撫でさせてもらおう。それで充分うれしくなるのだから、これはこれで幸せなことだと思おう。

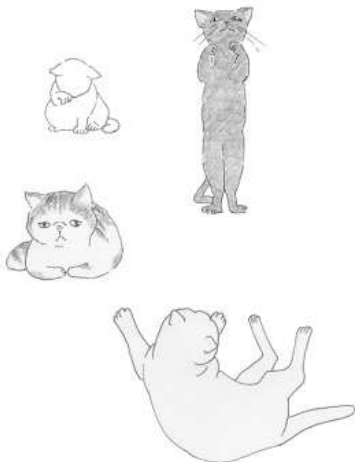


イラスト あきの素生

# 許さない女



ドラマメリア

(座敷わらし)

細かなことがいろいろ気になる質だ。

スーパールのレジで新人さんのぎこちない手つきを見ては、「ああそんな入れ方をするとは生鮮食品がつぶれてしまうの……」とやきもきするし(レジ打ちのバイトをしていたのでつい厳しい目で見えてしまう)、どうみても漢字が間違っているのではないかこれは……という貼り紙を見かけると、「訂正しないのだろうか、いやそれとも気づいてないのだろうか」と目に触れるたびにそわそわする(昔、漢字検定に凝ったことがあった)。特段真面目でも几帳面でもないので、「小姑体質」と表現してもいいかもしれない。

師匠には「許さない女だ」とよく言われる。「ゆるさない」。たしかにそうかもしれない。

他者に寛容なほうでない、昔から。できている部分より粗が目につく。部下がいる立場ではないが、もしいたらあれこれ指摘ばかりして相手はさぞ息苦しくやりにくいのではないか。生まれもった性格はそうは変わらないのであるべく表には出さないように努めているが。

それ以外でも、コップ半分の水を見て「あと半分ある」と良い面にフォーカスするのではなく、「もう半分しかない。なくなつた場合はこうしないと」とシミュレーションしてしまう。心配性なのだ。心配性の小姑。正直言つて損な性格だ。

ただ、この性格もマイナスの面ばかりではない。最近なかなか衝撃的な人生の一大事があったのだが、「ええっ」と驚きはしたものの「なるほど、可能性はゼロではなかったもんなあ」と冷静に納得している自分がいた。悪いこともひとつとおり想定しておくこの性格に、今回は助けられているのかもしれない。



・編集後記:

あの後姪っ子は一人称をケロからケツケへ変えたそうです。本人曰く、これならお友だちの前でついそう言っちゃつてもだいじょうぶだから。らしい。大丈夫かな、そうかな……

ドラマメリア(編集長)

「Bookstore AID」のリターンとして作製した冊子をお送りいただきました。基金をお寄せくださった方々にお礼の形で作製されたものです。全国津々浦々の本屋の声が記載され、時代の記録です。感謝。

奈良敏行(発行人)